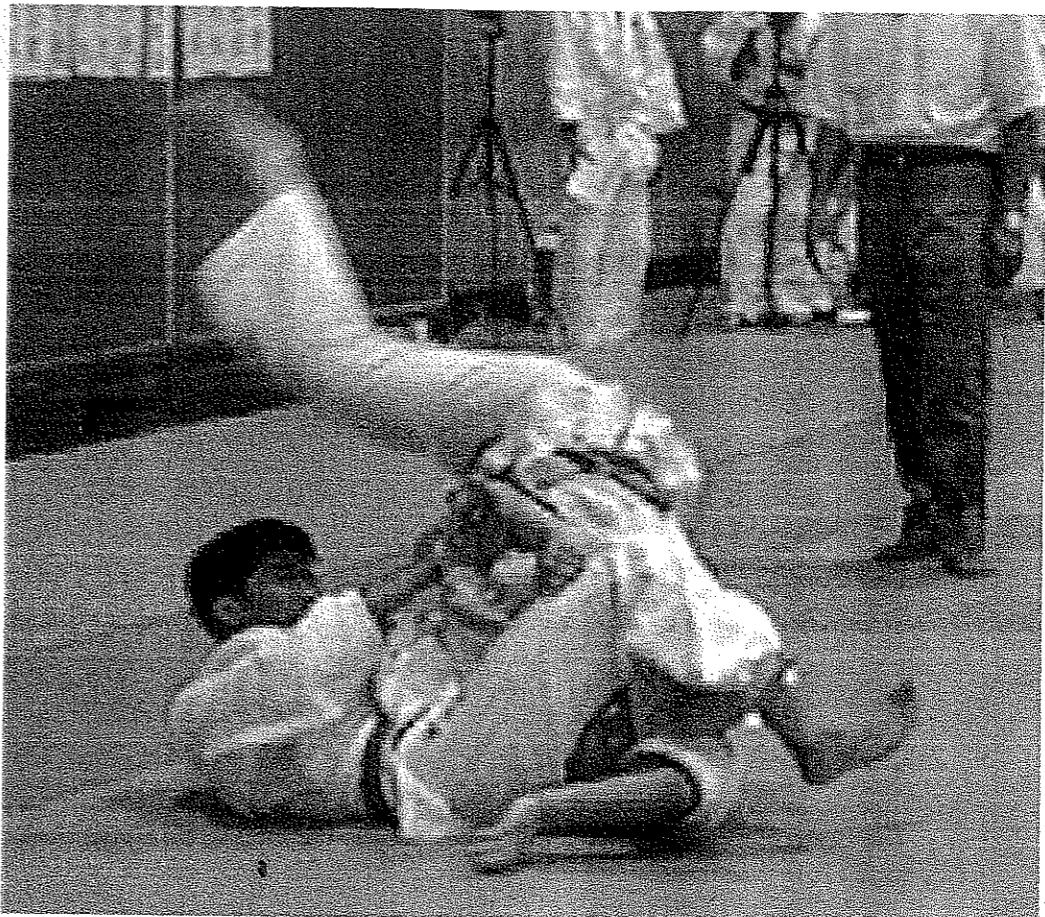
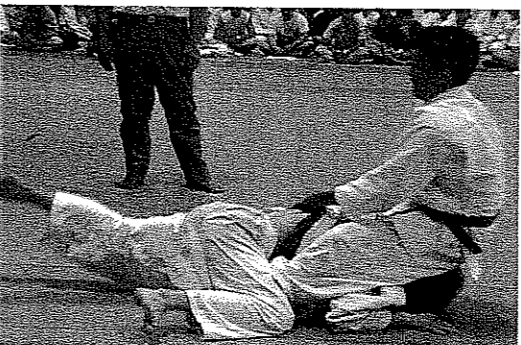


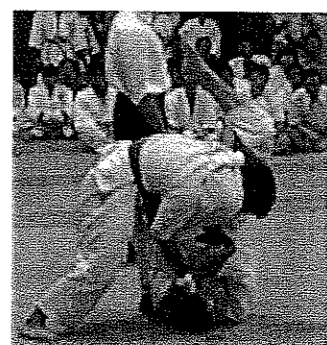
“もう一つの柔道”がここにある いまこそ七帝柔道を評価せよ!



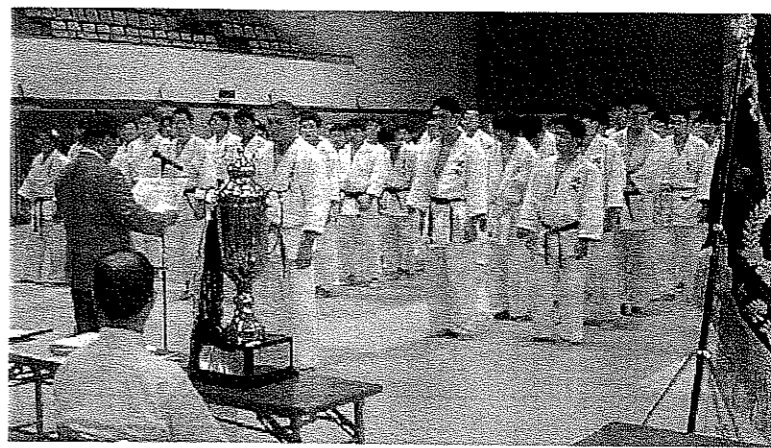
○決勝/東北大学・石黒部司VS名古屋大学・梅垣宗治。腕ひしぎ十字固めの態勢に入る。



○決勝/東北大学VS名古屋大学。カメで守る相手を崩しているところ。

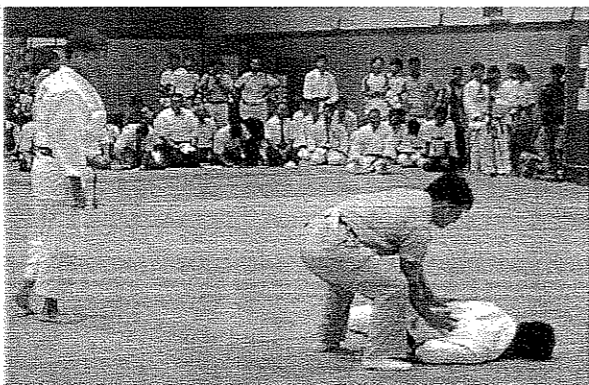
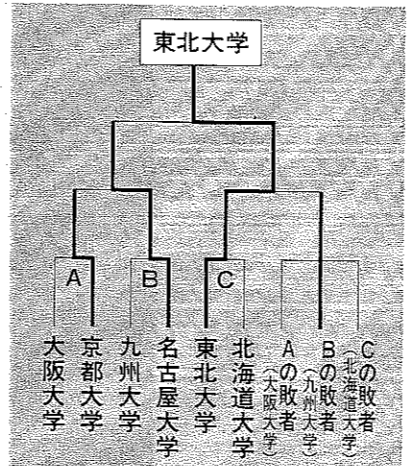


○準決勝/京都大学・後谷雄VS名古屋大学・山脇聖。主将の山脇は下から三角絞めを仕掛けていった。

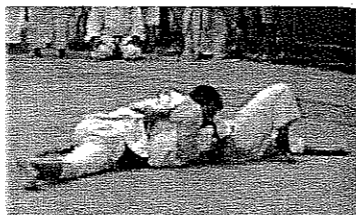
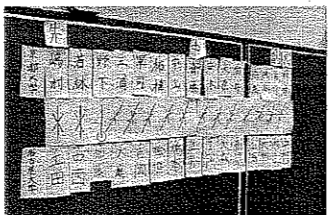


○優勝を飾った東北大学の三ツ星郁哉(工学部4年)主将。

寝技中心に争われる1チーム15人の勝ち抜き戦 今年は東北大が11年ぶり4度目の優勝を飾る



○準決勝/東北大学・松岡賢VS九州大学・馬場七。大将の源が絞め落とされ、主審が喝を入れている場面。



○東北大学・宮島雅祐VS九州大学・堀川俊夫。宮島が上方固めで入技。



○4度目の優勝を飾った東北大が七帝戦の特徴。



○故小坂光之助師範の遺影を抱きながら応援する名古屋大学陣営だ。決勝で惜敗した。



寝業研究会の 平田師範が逝去

東京・北千住にある寝業研究会で高専柔道を教授していた平田師範が、7月9日(木)に逝去された。平田師範は大正11年、岡山県出身。旧制津山中学時代に全国5連覇。関学高専では主将を務め、全国優勝の六高と引き分けクジリで涙を飲む。講道館でも長きに渡り指導。今年優勝の東北大も今春寝業研究会に訪れて稽古し、指導を仰いでいた。

**第47回国立七帝大学
柔道優勝大会**
国立七帝大学体育会
7月4～5日 福岡・福岡武道館

●決勝
1952, 86, 87年優勝
3-0 1955, 65, 82, 94年優勝
東北大学 名古屋大学
※3人勝利

バレストラ代表の中井祐樹(北海道大1993年卒)を育てた、寝技の「七帝柔道」。そのひのき舞台である通称「七帝戦」、第47回国立七帝大学柔道優勝大会が7月4、5日に福岡市の福岡武道館で開かれた。

寝技を鍛えあげた東北大が決勝で名古屋大を破り、11年ぶり4回目の優勝を飾った。同大の単独優勝は1952年の第1回大会以来の快挙。

大会は、東京大を除く旧七帝大、すなわち北海道大、東北大、名古屋大、京都大、大阪大、九州大の6大学による変則トーナメントで争われた。東北大は準決勝で、鋭い立ち技の九州大に対し、寝技で確実に抜いて5対3で勝利。決勝では、準決勝で4連覇を狙う京都大を1対0で阻んだ名古屋大と対戦。寝技で2本取り、3対0で降した。

現役時代寝技の名手だった大森浩・東北大監督(36)は「センスが要求される立ち技と比べて、寝技は練習量が反映される。大学からの初心者を試合で戦えるようにするためにも、寝技を鍛え研究している」と話した。「寝技8、立ち技2」の割合の日々の練習が優勝への道を開いた。

七帝柔道の特徴は、組んだ状態から尻もちをつき倒れ込み、寝技に誘う「引き込み」が認められていること。立ち技重視の講道館ルールでは、即反則にとられる技だ。また、寝技の攻防の途中で審判が中断して両者を立たせることがない。さらに、勝負は一本勝ちしかなく、「技有り」だけでは引き分けになる。このへんも「有効」「効果」まで認めているポイント制の講道館柔道とは異なっている。

このため1チーム15人の勝ち抜き試合は、ほとんどが寝技にもつれ込み、時間いっぱい戦っての引き分けが多い。一本取ることが貴重になり、強い相手と当たったら徹底して寝技で引き分けに持ち込む。失点が許されない重苦しい雰囲気の中、長丁場が続くのである。

七帝柔道は、戦前の高専柔道の流れをくむ。やはり「引き込みあり、

一本勝ちか引き分け」の高専柔道は、旧制高校の対抗戦で花開いた寝技中心の柔道。四高(現金沢大)、五高(現熊本大)、六高(現岡山山)などのナンバーズクールの覇を競い、下からの返し技や、固め技、絞め技、関節技が次々と開発されていった。四高時代に柔道に打ち込んだ作家の井上靖が自伝的小説「北の海」の中で、寝技で一本勝ちを追求する高専柔道を「練習量がすべてを決定する柔道」と振り返っている。

そんな高専柔道を引き継いできた七帝柔道だが、転換期を迎えているようだ。東京五輪(64年)で正式種目になって以来、世界へ普及したジュウドウは、外国人の目にも分かりやすい立ち技に傾いてきた。多くの大会で寝技になるとすぐに審判の「待て」の声がかかる。そういう背景もあり「寝技重視の七帝ルールではほかの試合に通用しない」と東京大が、91年の第40回大会から出場を辞退している。

残る6大学でも、寝技の取り組みはまちまち。七帝戦の勝ちの内容を見ても、いまだ半分以上は寝技だが、立ち技が毎年確実に増えている。地道な努力よりも、一瞬の華やかさ。寝技と立ち技の達成感の違いをこう言い表すと、今の学生の気分に近いのはどちらか分かるだろう。

一方で、昨年、高田延彦を破ったヒクソン・グレイシーの活躍もあり、プロの格闘技界ではブラジリアン柔術をはじめ、寝技再評価の機運が盛り上がっている。そんな中、七帝柔道とブラジリアン柔術が接近した。今年3月、バレストラが主催したブラジリアン柔術の大会に、東北大の選手2人と九州大OB1人が出場した。2勝1敗の結果以上に、七帝柔道の寝技の巧みさを印象づけた。七帝柔道の新たな可能性として、注目される。

東北大の大森監督は「学生が求める限り七帝柔道を続ける。講道館柔道以外に、多種多様な柔道があってもいいのではないかと提案する。

(古賀 亮至)